

「ペットの命のために自治体で進む取組み」

私たちの回りには、ペットを家族の一員として迎え、ペットとの心豊かな暮らしを送っている家族がたくさんいます。その一方で、日本には温かな家族とのふれあいを得られず、殺処分されている犬や猫がなんと年間 35 万頭を超えているという悲しい報告があります。こうした悲しい数字を少しでも減らすため、これまで多くの動物愛護団体や NPO、そして個人のボランティアが中心になって活動してきましたが、今、自治体が運営する動物愛護センターも殺処分を減らそうと様々な取組みを始めています。動物愛護センターはいわば罪もなく収容されたペットたちの最後の場所でした。しかし、そこでもう一度彼らに生きるための権利とチャンスを取り戻してもらうために何かできないか、飼育できないとペットを持ち込む人たちにもう一度考えてもらう機会を提供できないか、この場所だからこそ伝えられるメッセージがあるのではないかと、人とペットの共生における大切なテーマの下、多くの動物愛護センターがいろいろな活動を進め、その効果が各地で現れ始めています。

その中でも熊本市動物愛護センター(熊本県)は着実に成果を収めているセンターの一つです。このセンターでは、譲渡会、しつけや終生飼育に関する講習会、地域猫の不妊手術の促進などの活動の他、収容されたペットを写真付きで市のホームページに紹介し、里親の応募や迷子の返還を促す工夫をしています。里親募集中のペットはそれぞれの性格も紹介されています。また、ペットを持ち込む人たちには、飼育ができなくなった理由を尋ね、必要ならばアドバイスをし、しつけの問題の場合にはトレーナーを紹介するなど、ペットオーナーとしての責任や命の大切さについて時間をかけて話をするそうです。センターの所長である松崎正吉さんは取組みのきっかけについて、次のように話してくれました。「ただ殺処分したくなかった。そんなセンター職員全員の気持ちが始まりです。平成 11 年の動物愛護法の改正をきっかけに、熊本市でも行政としての取組みを再考し、センターが中心になって動物愛護推進協議会を設立し、状況を改善するための活動を開始しました」。こうした活動の結果、このセンターに収容された犬や猫の生存率(返還や譲渡により殺処分を免れた頭数の率)は、現在犬 76%以上、猫 63%以上で、活動開始当初と比較するとなんと 5-6 倍にまで上がっており、全国的にも非常に高い数字になっています。センターの活動は地域にも徐々に認知され、ペットの飼育責任を考えるための啓発活動としても機能しているようです。松崎さんによると、このセンターの取組みが比較的順調に進んでいる理由の一つに官民の協力があるといいます。「民間の動物愛護団体やボランティアとはアプローチの違いもあり距離があったのは確かですが、お話していると、結局みんな『殺処分を減らしたい』という同じ目的を持っていました。そうしたら協力体制は自然と形になっていきました。行政だけではできないことも、こうした民間団体との協力が活動の幅を大きく広げてくれたのは確かです」。行政の取組みは地域における影響力も大きく、さらに民間との連携がより大きな効果を示している例といえます。

愛護センターがペットとの出会いや終生飼育を学ぶ場所となり、やがて悲しい数字がゼロになる日がくると信じているものです。そのためにはまず無責任な飼育を減らすことが必要です。熊本市愛護センターでは、近々市内の小学校を訪問し、犬や猫も命ある生き物だと伝える啓発活動を開始するそうです。「ただ動物好きが増えるのではなく、命の重みを理解して愛情をもって正しく飼育してくれる人が増えてほしいです」。松崎さんたちのメッセージはきっと小学生にも届くことでしょう。

マース ジャパンは、製品や社会貢献活動を通して、人とペットが共に暮らす笑顔あふれる社会の実現を目指しています。このニュースレターは、マース ジャパンが人とペットの共生をテーマにした研究や支援活動を目的に 1997 年に設立したリサーチセンターである非営利団体コンパニオンアニマル リサーチ(CAIRC)とマース オーストラリアがサポートするコンパニオンアニマルに関わる活動を推進している PIAS と協力して発行しています。

お問い合わせ: マース ジャパン リミテッド 広報室 小川 電話:03-5434-3334